

【基調講演】

文化のバトンをつなぐためには！

～最新動向からみる文化ボランティアの現状と課題～

独立行政法人日本芸術文化振興会

プログラムオフィサー 柴田 英杞氏

皆様おはようございます。今ご紹介に預かりました柴田でございます。

今日お話しさせていただきますのは、基調講演というよりも基調報告に近い内容かと思えます。

今、我が国の文化政策は大きな転換点を迎えているのではないかと考えており、その状況を皆様にご提供すると共に、一緒に考えていくきっかけ作りの情報を今日集めて参りました。我が国の文化政策は昨年から今年にかけて急速に変わりつつありますので、まず、そこら辺の話から始めていきたいと思います。

今回のフォーラムのテーマが結構切実なテーマで、“高齢化克服”という強烈なタイトルになっています。これについては、福岡県だけの問題、課題ではなくて、全国的な問題としてとらえてよろしいか、と思っています。文化ボランティアだけではなくて、都道府県に組織されている文化団体連合会のような協会組織でも高齢化が非常に問題となっています。いかに後継者を育成していくか、作っていくか、誰にそのバトンを渡すのか、渡せるのか、といったことはとても重要なテーマだと思っていますので、そこら辺を中心にお話をさせていただきたいと思っています。

まず「文化ボランティアの位置づけは？」であります、

文化ボランティアの位置づけというよりも、これまでの文化政策の流れをおさらいしてみようということで作ってみました。

2001年に文化芸術振興基本法が制定され、我が国の文化振興の基本的な考え方が初めて定まりました。ここでは具体的な施策を詳細に記述するというよりも、「こういう方向で我が国の文化政策を進めていきたい、発展させていきたい」という基本的な考え方が格調高く書き込まれている、というのが特徴です。2001年までは、こういう法律もなく、文化政策が進められてきました。この基本法の制定と共に、翌年に、第一次基本方針というものが策定されます。その中に文化ボランティアという文言が初めて明記されましたが、具体的には、2002年から文化ボランティアの助成事業というのが始まりました。

この当時の文化庁長官は、お亡くなりになりました河合隼雄さんという方が長官を務めておられ、皆さんもご存知かと思いますが、心理学の研究者でした。

この河合長官が「文化ボランティア活動を全国的に浸透させていきたい、活発化させていきたい」という強い思いがあり、提唱されました。その背景にはコミュニティの崩壊とか、財政破綻とか、いろいろ社会的な問題が多発していた時期でしたので、そのコミュニティの分断、あるいは、人と人とのつながりが希薄になっている社会を「人と人との絆」によって紡ぎ合わせていくことが必要なのではないか、とお考えになったようです。

文化ボランティアという活動は潜在的にはありましたが、それをもう少し顕在化させたい、という考えがありました。そこで、全国文化ボランティアフォーラムが4回だったと思いますが開催されて、述べ600人から800人ぐらいの文化ボランティアの方々が集まった、という実績があります。当時「文化ボランティア助成事業」というのがあり、全国で約30団体ぐらいに助成金を配分して、文化ボランティアのモデルを作っていこうとして始めたものです。6年ぐらい文化ボランティアの育成事業というのを助成してきましたが、そこで明るみになったことは、“コーディネーターがいない”という課題が浮かび上がってきました。

それは文化ボランティアをいろいろマネジメントしていく人がいないために、文化ボランティアをやりたいという人をうまくまとめ切れていない、調整できていないという現実が、見えてきました。

文化ボランティア実践者の方々の想いを引き出していないという気付きから、その後2年間は「文化ボランティアコーディネーター育成事業」というものを展開してきました。

2011年に政権交代がありましたので、その事業はスクラップアンドビルドされて、「新しい公共」という施策の中に統合されたという経緯があります。

2003年には文化庁が、官房政策課に文化ボランティア専門官という役職を配置しました。現在でも政策課の専門官はこの文化ボランティア専門官という職を併任していらっしゃいます。昨年こちらのフォーラムにお呼びしました三木さんという方は、文化ボランティア専門官という肩書もお持ちでした。今は、新しい方が務めておられます。

2005年には第四次基本方針ができますが、この第四次基本方針までの間にも文化ボランティアという文言がしっかりと明記されております。

先ほども申し上げましたとおり、2006年から2008年まで、全国文化ボランティアフォーラムが開催され、個々の文化ボランティアの支援というよりも“地域の文化活動の担い手としての文化ボランティア”というのがクローズアップされました。2015年には緊急提言といたしまして、「文化芸術立国の実現を獲得する文化政策」というものが発表されましたが、「文化ボランティアの育成と確保に向けた取り組みの強化」というのが明記されています。

本年2017年には、新しい基本法が出来ました。今までの「文化芸術振興基本法」から「振興」がとれて、「文化芸術基本法」という法律になりました。

この成立を受けて、現在第一期文化芸術推進基本計画というものを文化審議会、文化政策部会の中で審議中です。その中にも文化ボランティアの内容が盛り込まれる予定です。

このような流れの中ですが、今、助成事業として明確な施策はありません。

平成30年度の文化庁概算要求の中身を見ても、文化ボランティアに対して新しい施策として、助成事業を位置付けるという動きはありませんが、この基本計画とか、基本方針の中には絶えず「文化ボランティア」という文言が明記されています。

特に2020年東京オリンピックの開催に合わせて、文化ボランティアの担い手を増やしていこうという考え方もありますが、まだまだ2020年に向けての全国的な機運の盛り上がりには欠ける状況です。

今年度中に、この新しい文化芸術基本法の成立を受けて、第一期基本計画が策定されます。予定では、年末から年始にかけてパブリックコメントを行い、その後、3月までの間に、2018年から2022年までの5か年間を想定した基本計画が策定されます。2020年あたりで中間報告を入れることになっています。

この基本計画の中に盛り込まれたものについては、必ず実践しないといけないもので、基本方針よりも幾らか具体的になってきます。あと政策評価という「指標」も現在作っていますので、今までの文化政策よりは、かなり厳密な形で推進されていくのではないかと、という予想をしています。その中に盛り込まれないと、いろいろな施策がとりあげられる確率も低いということで、「文化ボランティアの内容を強く盛り込ませたい」と個人的には考えています。

さらに、この「文化ボランティア」がどこに位置付けられているかというと、「専門的人材の育成」に位置付けられていますので、文化ボランティアも文化芸術の専門性のある程度持ったような位置づけになるのでは、という予想をしています。

その次、「ボランティア活動の状況の①」というところです。

これは平成27年度の社会教育調査から引用したのですが、数年に1回、このような調査が行われており、大変興味深い数字が出ています。今、出ているのが平成14年度から27年度までの状況です。

ピックアップしてまとめたものですが、ここで興味深い数字というと、公民館と劇場・音楽堂等が、文化ボランティア助成事業が始まった平成14年度からボランティア活動が減少しているということがポイントとなります。

逆に図書館、それから青少年教育施設、博物館などは、伸びている傾向にあります。

この増加・減少が、どういう理由から起こっているかについては、分析が出来ていないので何とも言えませんが、「少子高齢化の影響は、必ず受けているだろうな」ということは考えられます。特に公民館はそういう影響を大きく受けているのではないのでしょうか。

それから、図書館と博物館の分野は大変健闘していますね。図書館は読み聞かせが活発化してきているのか、それ以外の何か図書館での活動があるのか、これは読み聞かせのグループの方に（今日、多くの方が参加していらっしゃいますので）お伺いしてみたいところですが、大健闘しているのではないかと思います。

博物館もかなり健闘しているのではないかなと思いますが、どこまでこの数字が伸びていくかは、今後次第というところでしょうか。

一番心配なのは劇場・音楽堂です。私も劇場で働いている者の一人で、この数字を見て、とても深刻に受け取りました。

この平成14年というのは、先ほども申し上げた通り、河合隼雄長官が文化ボランティアを提唱され、活発化させようという運動を始められた頃で、それから比べると平成27年の数値が随分下がってしまっているということで、非常に深刻な問題だと思います。

ここで要因として言えることは、平成15年から平成18年にかけて導入されました、指定管理者制度の影響というのは否定できないのではないかと、と思っています。

こちらの「とびうめの会」は、国民文化祭以後、レガシー（遺産）としてボランティア活動を、ずっと続けていられています。「とびうめの会」のように続いている自治体は少ないと思います。

私もいろいろな自治体でお話を伺ったり、助言やアドバイスをしたり、今は、さいたま市の文化振興事業団というところで、ボランティア活動の活性化に向けたいろいろな講座のコーディネートをしています。講師で呼び出す先生方の人選に非常に困っています。というのは「既に知られている団体、決まった人たち」の顔しか浮かび上がってこない状況です。あれだけ平成14年度から活発化していた文化ボランティア活動、特に劇場・音楽堂で活動していたボランティアさん達が、分散してしまったのではないかと、ということに非常に強く感じます。

逆に、このあと講演をお願いしている藤原さんの事例、現代アートを活用したアートプロジェクトの事例のご紹介がありますが、アートプロジェクトは全国花盛りで、活動が大変活発化しています。非常に面白い、ユニークな事例のご紹介があるのではないかと楽しみにしています。

今、アートプロジェクトという分野でのボランティア活動は、「これがボランティア活動といえるのか」という活動が活発化しています。そういう新しいボランティア活動の動きは、この社会教育調査には上がって来ませんので、これから調査をしていく必要があるのかな、と考えています。この社会教育調査というのは主に拠点施設を中心にした活動として捉えていますので、どういう形で調査が入ってくるかわかりませんが、新しいボランティアの流れというのが今、出てきているということを皆さまもご承知おきいただきたいと思います。

「とことん討論会」の時にも、こういうデータを活用して意見交換をしていただければありがたいと思います。

次に、「ボランティア活動の状況の②」のところですが、ここは去年ご報告させていただいたおさらいも含めて、皆さまと情報共有をしたいと思っています。

この平成27年度の社会教育調査におけるボランティアの登録者数ですが、これは文部科学省が調査をしたもので、総数が51万人になっています。これは確か、平成17年か18年の時には60万人位だったはずですが。

総数51万人のうち女性が33万人ということで圧倒的に女性のほうが多いですが、総数51万人のうちの登録者数としては、何と言っても公民館活動というのが活発化していて17万人、それから、かなり減少しますが図書館、社会体育施設の順に登録者数が多いという状況です。

社会体育施設については、これから2020年のオリンピックもありますので、増加傾向に転じていくのではないかと思います。スポーツボランティアも来年度から本格的にスタートしますので、スポーツに関係するボランティアは増えていくのではないのでしょうか。

今日のテーマが「若者との出会い」ということですので、古いデータですが、平成18年度になされた「文化ボランティア実態調査」から、若年層だけの割合を拾ってみました。

この文化ボランティアの捉え方は社会教育調査の施設を対象にしており、当時は20歳未満が男女とも3%~4%。それから20歳~29歳までが男女11%~14%で推移していたということがわかります。

次に、寄付というところからボランティア活動の若年層の割合を見てみますと、平成27年度ですが、20歳代が男女とも17~18%ぐらい。30歳代が男女22%ぐらいということになっています。これはボランティア活動ですので、国際協力や、環境、災害支援、難民支援など、一般的なボランティア活動も含めての割合ですので、文化ボランティアに比べると割合としては多いということになります。

今、学校教育の中での「社会貢献活動の経験」という、日本ファンドレイジング協会が強力に推し進めている活動があります。それは、成人になってからボランティア活動が始めるのは、これから少なくなっていく、特に“少子高齢化”になっていきますと、あえて成人になって、しかも働き盛りの年代にボランティア活動に入っていく人は少なくなっていくのではないかと考えられます。

また寄付についても、子供のころから寄付教育を行い、寄付に対するいろいろな考え方を深めていくという機会を設けないと、いきなり勤めだしてから「寄付どうですか」といわれても、なかなか寄付文化が醸成されないだろうという、そういう問題意識の元に日本ファンドレイジング協会が積極的に行っているのが寄付教育という活動であります。

福岡市内でももう始まっていると思いますし、活発化しているのは北九州市です。学校教育の中に寄付教育というものを設けて、教育をされています。この学校教育における社会貢献活動の経験が、成人になってからの寄付活動やボランティア活動につながって行くということです。

そのような状況から文化芸術も同様だと思いますが、「幼い時から芸術・文化に親しむ」という機会をどれだけ作っていけるかによって、寄付にも繋がるし、実践的なボランティア活動にも繋がるのではないかと期待されます。

この2~3年ぐらい前から、この寄付教育を推進することができるようファシリテーター育成を、ボランティア協会でもやっており、私も参加をさせていただいています。

次に、まとめになりますが、「文化のバトンを繋ぐためには」どういうことをしたらいいのかということです。

このテーマは今日午後から意見交換の後、またワールドカフェを実践していただきますが、その時のテーマ「出会いの場づくり」ということに関して、5つほど上げさせていただきました。

まず ①「文化活動拠点でのボランティア活動の活性化を再検討する」必要があるのではないかとことです。特に公民館とか劇場・音楽堂、ホール関係は本当に深刻な問題があります。②「学校教育の中での社会貢献活動の実践を考える」必要性はあるのか、ないのかということです。

それから ③「新しいボランティアニーズを発見する」ということで、今、ボランティア活動の範囲が非常に幅広くなってきました。

新しい基本法においては、今までどちらかというと「実演芸術中心」、「顕在化された文化芸術活動中心」でしたが、特に来年度からの基本計画においては、「生活文化へ焦点を当てる」とか、「国民娯楽へ焦点を絞り込んでいく」とか、「若者文化を積極的に応援する」とか、「文化芸術の社会的・経済的な効果を高めていく」とか、「文化芸術のその波及効果を一層推進していく」というような、文化芸術の捉え方も非常に幅広くなっていきます。

そこで、今まで推進してきた文化ボランティア活動を見直して、新しい文化ボランティアのニーズを発見していかないことには、次に「バトンを繋いでいく」ことが出来なくなってきたのではないかと問題提起をいたしたいと考えます。

逆に ④「特定の目的に特化したボランティア活動にシフトする」というのも手ではないか。例えば福祉とか教育とか医療とかまちづくりなどとの連携や、社会包摂活動を推進したり、地域の活性化のための活動を推進していくボランティア、特化したボランティアというのもこれから必要なのではないかと思います。

それには ⑤「若者との橋渡し役、世話役のコーディネーター人材を、新しいところから発掘」していく必要があるのではないかとことです。

これらの指摘と問題提起を、皆さんに投げかけさせていただいて、午後の討論会において活発なご意見をいただきたいな、と考えております。

わたくしの基調講演はこれで終わりにさせていただきまして、若者代表の藤原さんにバトンタッチをしたいと思っています。

どうもありがとうございました。